

## RSL 科目履修から正課外活動展開における支援 —「学生の学びを支援する」ことをめぐる考察—

RSL センター 教育研究コーディネーター  
大森 真穂

### はじめに

立教サービスラーニング(RSL)センター(以下、「RSL センター」)では設立以来、「RIKKYO Learning Style」の具現化を目指して、ボランティアセンター等と協力・連携しながら、RSL 科目履修後の学生の正課外における学びの支援を行ってきた。これまでも「RSL-ローカル(南魚沼)」履修者によるパノラマ米販売や栃窪トラベル、とちっ子米販売など、様々な事業が展開されてきた<sup>(1)</sup>が、今年度(2022 年度)は「RSL-コミュニティ(埼玉)」履修者有志によって「食品・文房具・学習参考資料募集」の企画が実施されるに至った。

本学では、戦後の新制大学発足にあたりアメリカから導入された「Student Personnel Service」(学生助育)の理念を建学の精神に基づき理論化・具現化し、正課外教育として学生が成長する機会を提供する「助育プログラム」を展開してきた歴史がある。大森(2021)では、1950 年代から 60 年代にかけて立教大学で形成された「立教キャンプ」などに代表される助育体制の基盤について明らかにするなかで、助育の理念は必ずしも「正課外」の領域にとどまるものではないことを提起した。従来から助育は、正課外活動の文脈で検討されてきたが、大学の授業での教育手法の多様化を踏まえると、今後は正課における助育についても検討していく必要があるだろう。特に、正課と正課外における学びの往還の支援を掲げる RSL センターにとって、正課を始点として学生の学びや成長をいかに支援することができるかは重要なテーマである。

このような問題関心に基づき、本稿では、「RSL-コミュニティ(埼玉)」履修者有志によって行われた上記正課外活動について、この企画をサポートした教育研究コーディネーターの視点から実施までの過程を振り返り、またそのことを通して、「学生の学びを支援する」とはどういうことかという問いについて改めて考えていきたい。

なお、企画者の学生の視点から、科目履修から本企画実施までの過程について振り返った体験談は、本報告書 pp.11-15 に掲載している。学生の視点と大学スタッフの視点から見た景色はどのように重なり、また異なるものであったのか。本稿はそのような視座からもお読みいただければ幸いである。

### I. 本企画実施の背景・経緯

「RSL-コミュニティ(埼玉)」(「RSL-1」)は、センター開設前の先行実施科目として 2014 年度より開講しており、RSL センター主管科目のなかで最も長い実績を持つ科目の一つである。この科目では、サービスラーニングの手法に基づきながら生活保護・生活困窮者自立支援制度の運用実態に触れるとともに、貧困と格差、社会的包摂等を巡る諸問題についての理解を深めることを目的としている。履修学生は事前学習で生活困窮や子どもの貧困の問題について学んだうえで、学外活動として、一般社団法人 彩の国子ども・若者支援ネットワーク(通称「アスポート」)が埼玉県内で運営する学習教室に学習支援ボランティアとして 8 回以上参加する。事後学習では、この学外活動での体験についてリフレクションを行いながら、そこでの気づきや学びをアスポートへの事業提案というかたちで班ごとにまとめていく。最終授業時の報告会では各班からアスポートスタッフの方々の前で提案を行い、アスポートスタッフの方々からは、実際に学生の提案を取り入れる場合の実現可能性や提案された企画にどのような効果または課題があるか等について、現場

の視点に立脚したコメントをいただいている<sup>(2)</sup>。

科目担当の田中聡一郎先生(本学兼任講師)は科目開設時より本科目を担当されており、RSL センターの掲げる理念やミッション(シティズンシップ教育、正課・正課外の学びの往還など)についても深く理解を示してくださっている。事後学習の報告会での提案内容について、田中先生は「実際に自分たちが実現可能な企画を提案するように」ということを履修生に対して折に触れておっしゃっており、学生の熱意が強く実現性が高いと認められた企画については、授業終了後に正課外活動として実現できるよう、提案者の学生たち・アスポート・RSL センターの三者に働きかけてくださってきた<sup>(3)</sup>。2021 年度の授業終了後も、1つの班が提案した「ひとり親世帯への支援～ RSL フードドライブの実現に向けて～」という企画について、田中先生がこの三者に声を掛けてくださり、正課外活動として実現に向けて動き出すこととなった。

## II. 教育研究コーディネーターの役割

立教大学には「教育研究コーディネーター」(以下、「教研 C」)という、他大学では助手に相当する職種が置かれている。所属する学部等により具体的な業務内容は異なるが、RSL センターの教研 C は、RSL センター主管授業の支援や学外活動の業務委託先団体との折衝等の中心的な役割を担う。RSL センター事務局(以下、「事務局」)は専任職員と教研 C、派遣スタッフで構成されており、上述のように教研 C は学外の折衝を担当し、専任職員は学内における折衝を中心に行うといった分担のもと、センター運営および授業運営の業務を相互に協働して行っている。この原則に基づき、今回の正課外活動に関連する業務については、教研 C である筆者が学生・田中先生・アスポートとの窓口となり、適宜事務局や正副センター長へ報告・相談を行いながら進めていくこととなった。

筆者は、実施に向けた準備を進めていくにあたり、本企画は学生が主体となって行う正課外活動であることを念頭におき、RSL センターが主に担う役割について仮説的に次の 2 つに整理した。

- ①学内調整:RSL センター内の調整および学内の関係部局との折衝
- ②学生支援:学内調整に関わる手続きや日程等のマネジメント、進め方全般の相談対応など

上記の RSL センターとしての関与の方針については、RSL センター政策会議で提案し承認を得るという手続きを踏み、本活動を本格的に進めていくことを決める時点で学生と田中先生に説明を行い、両者からも理解を得た。

## III. 学内調整:本企画の実施が決まるまでのプロセスを中心に

本企画の構想から実施までには、2021 年 11 月から 2022 年 12 月にかけて、およそ 1 年という時間を要した。この間には、学生の主体性を第一に考えながらも、学内のルールや COVID-19 対策などの制約や関係各所からの要望や希望と向き合うなかで、筆者自身も試行錯誤の連続であった。このようなフードドライブの取り組みは学内でもアスポートでも前例のない試みであったため、実施までの手順やスケジュールが予め逆算できていたわけではなかった。「学内調整」とは一口にいっても、どの部署に交渉するのか、どのような資料が必要になるのかも含めて手探りの状態であり、専任職員と一つひとつ相談しながら必要な手順を確認・整理していった。そのため、学生や田中先生、アスポートの方々に対しては直前まで実施の確約ができないまま、準備や調整を進めていかなければならないという不安やプレッシャーが常にあった。

この企画は先述のとおり、構想から実現までにおよそ 1 年掛かっているが、実はその間には一度、活動が

頓挫していた時期がある。当初、2021 年度の最終授業における報告会の時点でこの企画は、5 名のメンバーが、全学生と教職員を対象に 10 日間にわたって食品の寄付を呼び掛けるという比較的規模の大きいものとして構想されていた。しかし、食品の保管のために大学の倉庫を使用するためにはしかるべき会議に諮る必要が出てくるほか、この案をそのまま実現するにはいくつか高いハードルが生じることが見込まれた。加えて 2021 年 3 月から 22 年 4 月にかけては RSL センターの教員・職員の多くが任期満了や異動等によって入れ替わる時期であったため、この時期にセンターとして腰を据えてサポートに取り組むことは難しいと判断し、学生たちには年度明けの 5 月以降に実現性を高めた企画案を再検討のうえ提出してもらうこととした。このような経緯で本企画については年度を跨ぐこととなったが、春休みを挟んだために就職活動の本格化等の理由で集まるのが難しいメンバーが出てくるなど、学生たちの活動は停滞してしまったようである。筆者も班のメンバーから個別に進捗状況を聞き取ったり、ボランティアセンターのコーディネーターに同席してもらって相談に乗るなどの働きかけを行ったが、活動を進展させるには至らなかった。

その後、本企画が実施に向けて本格的に動き出したのは 2022 年 8 月であった。田中先生より当初の案から規模を縮小して実施することはできないかのご提案をいただいたことをきっかけとして、当初の 5 名のメンバーのうち手を挙げた 2 名の学生と田中先生、筆者で打ち合わせを行った。その結果、RSL センター主管科目の一つである「大学生の学び・社会で学ぶこと」(担当:中沢聖史特任准教授/RSL センター副センター長)の教室で数回、授業前後の休み時間を使い、当該科目の履修生を対象として物品の回収を行うという枠組みが固まった。そしてここから、アスポートや学内の関係部署と相談・交渉しながら具体的な実施計画の作成を行い、これと並行して実施に向けた準備を進めていくこととなった。

学内調整として、まずは RSL 科目が属する「全学共通科目」を束ねている全学共通カリキュラム運営センターの事務局(以下、「全カリ事務室」)に企画概要の説明と必要な手続きについての相談を行った。そこでは、以下のような助言を得た。

- ①本件は今年度(2022 年度)開講科目の授業の一環としての実施ではなく、実施主体が大学公認の学生団体でもないため、RSL センターから企画書を全学共通カリキュラム運営センター(以下、「全カリ運営センター」)へ提出してもらう必要がある。
- ②企画書には、食品の取り扱い方法を含む実施内容と、「責任教員」(RSL センター所属の専任教員)を明確に記載する必要がある。
- ③本件は正課外活動としての実施であること、また食品を扱う内容であるため、学生部や総務部にも相談する必要があるのではないか。

このように全カリ事務室からは、RSL センターに対して、本企画の担当部局として責任の所在や食品管理のルールを明確化することが求められた。これらの助言を踏まえながら、企画者の学生や田中先生、アスポート、RSL センター専任職員と相談・調整を行った結果、本企画の実現に向けては次のような流れで準備を進めていくこととなった。

9 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・RSL センター長宛ての企画書の作成</li> <li>・RSL センター政策会議にて本企画の実施について承認を得る</li> <li>・学生部、総務部(総務課)への説明、相談</li> </ul>
-----	---

10月	・全カリ運営センター部長宛での提出書類の準備 ・全カリ運営センター内会議での取り扱いを依頼、実施についての承認を得る
11～12月	・フードドライブ企画実施(広報、物品回収、検品、発送、実施報告)

まずは RSL センター政策会議での承認を得るために、RSL センター長宛での企画書を企画者の学生を中心に作成することになった。ここで筆者は、学生が田中先生のご指導を受けながら作成した文書案について、①会議資料として体裁や記述は適切か、②提案の背景や動機が第三者に明確に伝わるか、③食品の取り扱いに関する記載内容に不足はないかといった観点からコメントを行い、学生へ加筆修正を促した。また、RSL センター政策会議で可能な限り具体的に学生たちの企画のイメージを伝えることを意図して、学生にはこの段階で広報用のポスター案の検討・作成も依頼した。田中先生からは、学生に対して「募集する物品を食品に限定すると、一人暮らしの学生などは余裕がなく、寄付が集まらない可能性が高い。より多くの学生に呼び掛けることを考えると、募集対象を参考書や文具等まで広げるということも考えられるのではないか」という問題提起があり、この点については企画者の学生の間で話し合い、結論を出すこととなった。

田中先生や筆者(RSL センター)からの投げかけを受けて、学生たちはアスポートへ改めて企画趣旨の説明と協力依頼を行い、企画書に盛り込む内容についての調整を行った。ここでは特に、募集する物品の種類(食品のほか、学習用具や子供用品まで拡大)や物品の受け取り条件(回収および検品の具体的な条件)について、学生とアスポートの間で合意形成がなされ、その内容が企画書に盛り込まれた。

RSL センター政策会議では、学生が作成した企画書とポスター案について、筆者が代わって説明を行った。その結果、①RSL センターが担当部局として本企画の実施に向けて準備を進めていくこと、②副センター長の中沢先生が「責任教員」として本企画を支援することが承認された。

RSL センター政策会議での承認を経て、RSL センター専任職員と筆者が、学生部と総務部(総務課)に企画概要の説明・相談を行った。両者からは、企画書の記載内容が適切であること、責任の所在(部署・教員)が明確に示されていることが評価され、実施について手続き上問題はないとの回答を得た。さらに、学生たちが本企画を提案した背景や動機についても共感をもって受け止められ、温かい言葉を掛けていただいた。このやり取りのなかでは、田中先生とアスポートが長年にわたって本科目に携わり真摯に実践を重ねてきてくださったことが他部署からの RSL センターへの信頼につながり、このような前例のない取り組みの扉を開くうえで大きな力になったことを実感した。

総務部(総務課)からは、食品の取り扱いに関する責任の所在を明確にするために、RSL センターとアスポートの間で合意書(覚書)を締結するとよいという助言を受けた。学内にもアスポートにも前例がなかったため、インターネットで NPO 団体等が作成したフードバンクやフードドライブに関する書式を検索し、それらを参考にしながら今回の企画に合わせて合意書の文案を一から作成する必要があった。本来であれば、これらの作業を学生に任せて学びの機会を提供すべきであったが、締結までのスケジュールを逆算するとそのような時間的な余裕がなかったため、今回は筆者がたたき台を作成し、学生にはアスポートへ①合意書締結の目的の説明と②記述や内容についての確認依頼をってもらうこととした。こうして合意書の文案が完成し、学内でリーガルチェックを受けたのちに、アスポートとの取り交わしを行った。そして、この合意書と企画書等の資料を取りまとめたものを全カリ運営センター部長宛てに提出し、正式に学内で本企画を実施することが認められるに至った。

#### IV. 学生支援:「学生の学びを支援する」とはどういうことか

「学生主体」ということを前提として考えていたものの、実際に準備を進めていく過程では、学生の主体性を尊重するとはどういうことなのか、がだんだんわからなくなることがあった。実現に向けて関係各所との調整が進んでいくうちに、学生に対してこちらから提案や依頼をすることが増えてきたことについて、当時筆者のなかでは、学生の企画案を最初のかたちで実現させられなかったことや、学生自身に判断を委ねる余地が少ないことにどこか後ろめたい気持ちもあった。また学生に対して事務的な連絡をするばかりで、自分は学生に寄り添う関わりができていないのではないかと葛藤することもあった。これは裏を返せば、筆者のなかで「学生主体」とは、学生が自分たちのやりたいことを自分たちで考えて決断しながら実現していくことであり、そのために必要なことを学生と同じ目線に立って一緒に考えるという姿勢が「寄り添う」ということなのだという固定観念のようなものがあったともいえる。

しかし、果たして筆者が思い描いていた「学生主体」のイメージは正しいものだったのだろうか。確かに、この企画が実現に向けて進んでいく過程では、様々なルールや条件、制約などが生じたことにより、当初の予定が変更になったり諦めねばならないことも出てきたことは事実である。また関わる人が増えることによって様々な意見やアイデアが寄せられるようにもなった。これらによって生じた結果は、学生自身の意思で起こったことではなく、学生自身が決断したことでもないものもあったかもしれない。しかし、実際の社会においては、例えば仕事の場面を考えても、なんらかの条件や制約は必ず付きまとうものであり、予期せぬアクシデントに見舞われることもある。そんなときに大切なのは、与えられた条件を精査し、どうしたら実現できるかを考え続けて試みることであろう。そしてそのためには、自分とは異なる他者の視点や意見に触れ協同することが大きな力になる。たとえば、今回の企画では、一度活動が頓挫していたところに田中先生が規模を縮小して実施するという提案をしてくださったことが実現につながった。また、紙幅の都合上ここでは詳細について触れることはできないが、アスポートのスタッフの方が募集する物品にクリスマスカードを加える提案をしてくださったことが、より多くの学生にこの活動に協力してもらうことにつながった。さらに、ボランティアセンターのスタッフからボランティア団体に所属する学生へクリスマスカードの作成協力を呼び掛ける提案を受けたことによって、企画者の学生とボランティア団体の学生との新たな交流も生まれることとなった。このように、最初は 5 人の学生から始まったこの企画は、やがて、企画者の学生たちだけのものではなく、関わる人々にとっての「自分事」となって枝葉を伸ばすように育っていったのである。この過程のなかにこそ、学生たちにとっての「学び」があったといえるだろう。

このように考えると「学生の学びを支援する」ということは、学生と同じ視点に立つというだけでなく、異なる立場の他者として誠実に向き合い、共に試行錯誤することであるとも言えるのかもしれない。学生と深く関わるということは、ただ学生の自主性や主体性を見守り励ますだけではなく、ときには自らが壁となって学生に対してルールや制約を示さなくてはならない場面も出てくる。しかしここで大切なのは、学生自身がその壁を乗り越えることができるよう必要な関わりを、意図をもって選択し、自らに対する反省も含めて向き合い続けるということなのではないだろうか。

#### おわりに

紙幅の都合によりここでは十分に触れることができなかったが、企画者の 2 名の学生たちは最後まで粘り強く丁寧に一つひとつの課題に取り組み続け、アスポートの子どもたちに“クリスマスプレゼント”を届けることができた。アスポートスタッフの方が活動終了後に 2 人に向けて掛けてくださった「授業終了後も子どもたちのために何かできないかと考えて行動に移したお二人のエネルギーに、私たち職員もとても励まされま

した」という言葉のとおり、2 人の熱意と行動力が学内外の多くの人を動かし、学内でもアスポートでも前例のない試みを実現に導いたのは確かなことであろう。正課・正課外における学びの往還の支援の仕掛けとして、2 人には、リフレクションの機会を意図し本報告書で体験談の執筆を依頼した。今回の正課外活動を終え、本人たちにとって、アスポートの活動やアスポートが取り組む「子どもの貧困」「見えない貧困」等の社会課題に対する認識はどのように変化したのか、あるいは変化しなかったのだろうか。この活動が、学生たちにとってまた新たな関心や取り組みのきっかけとなることを願っている。

最後に、今回の経験は筆者自身にとっても、学内外の関係者と協同しながら新しい取り組みを創る、チャレンジするといった意味で、「シティズンシップとは何か」ということについて体験的に学ぶ機会となった。そして何より、RSL センターの活動が、学生を受け入れてくださる活動先団体(地域)の皆様、科目担当の先生方、履修学生、大学という全ての関係者によっていかに支えられているか、またこれまで積み重ねられてきた信頼関係の重みを、今改めて実感している。

授業時から学生の相談に乗り、双方にとって初めての試みにも関わらず共にチャレンジして下さったアスポートの皆様、学生の正課・正課外の学びの往還を促し支え続けて下さった田中先生、適切な助言や物品の寄付をくださった RSL センター・ボランティアセンターをはじめとする学内関係者の皆様、そして寄付やクリスマスカードの作成に協力して下さった「大学生の学び・社会で学ぶこと」履修生の皆さん・ボランティア団体の学生の皆さんに改めまして心より御礼を申し上げます。

#### <注>

- (1) 「RSL-ローカル(南魚沼)」履修者による正課外活動を含めた学生体験談は、『立教サービスラーニング(RSL)センター 2018 年度活動報告書』に掲載されている。和田(2019)を参照のこと。
- (2) 本科目の趣旨や授業デザインについては、田中(2017)、逸見(2017)で詳細に述べられている。
- (3) 具体的な事例として、『立教サービスラーニング(RSL)センター 2019 年度活動報告書』には、ダンスワークショップを実施した学生の体験談として、中根(2020)が掲載されている。

#### <参考文献>

- ・ 大森真穂(2021)「日本における SPS 理念の展開—1960 年代立教大学「助育」の事例を中心に—」立教大学キリスト教教育研究所『キリスト教教育研究』第 38 号、pp.43-64
- ・ 田中聡一郎(2017)「見えにくい社会的課題を考える—子どもの貧困と学習支援」逸見敏郎・原田晃樹・藤枝聡編著『リベラルアーツとしてのサービスラーニング—シティズンシップを耕す教育』北樹出版、pp.125-139
- ・ 中根佑希海(2020)「『RSL-コミュニティ(埼玉)』とその先にある学び」『立教サービスラーニング(RSL)センター 2019 年度活動報告書』、pp.20-24
- ・ 逸見敏郎(2017)「子どもの未来を切り開く大学生—生活困窮世帯の中学生の学習支援」逸見敏郎・原田晃樹・藤枝聡編著『リベラルアーツとしてのサービスラーニング—シティズンシップを耕す教育』北樹出版、pp.162-173
- ・ 和田拓磨(2019)「『RSL-ローカル(南魚沼)』とその先にある学び」『立教サービスラーニング(RSL)センター 2018 年度活動報告書』、pp.21-27

## サービスラーニングと立教生の学び -RSL 科目「大学生の学び・社会で学ぶこと」におけるゲストスピーカーとしての授業実践-

RSL センター 教育研究コーディネーター

山田 寛之

### I. はじめに

「大学生の学び・社会で学ぶこと」は、2016 年の立教サービスラーニング(RSL)センター開設時から現在まで続く講義系科目である。初年次教育や自校教育を盛り込んだ全学共通科目の「学びの精神」カテゴリに配置された科目として、おもに立教大学に入学したばかりの 1 年生を対象に、履修者定員 200 人で、4 クラス開講されている。また、この科目は、サービスラーニングの入門科目として、RSL のカリキュラムに位置づけられており、学生が、この科目の履修を通じて、サービスラーニングを理解し、そして、多様な RSL の講義系科目や実践系科目の履修を継続し、RSL の学びを深めるきっかけになることが期待されている。

この科目の「サービスラーニング入門」としての授業運営の特徴の 1 つは、前半の 4 回の授業を立教大学の「自校教育」として、4 クラス共通のテーマで実施している点である(表 1 参照)。具体的には、「立教大学の歴史とキリスト教」「立教大学の正課外教育」「立教大学の正課教育」「立教サービスラーニング」について、大学内の関係部署の職員が、それぞれゲストスピーカーとして講義を受け持つ。そして、後半の授業では、科目担当教員が、「自校教育」部分の学習をふまえて、それぞれの専門分野の視点から、サービスラーニングに関する講義を行うという形式で授業運営が行われている(RSL センター, 2022)。なお、2022 年度は、平和教育論の中沢聖史特任准教授、キリスト教神学の中川英樹チャプレン、教育学の福原充兼任講師が、科目担当教員として授業を担当し、それぞれの専門分野の視点から、特徴ある教育活動が実施された。

本論の課題は、同科目において、筆者がゲストスピーカーとして初めて担当することになった「サービスラーニングと立教生の学び」をテーマとする授業の計画について、授業後の学生からのリアクションペーパーの記述をふまえて振り返り、今後の授業運営のためにできることは何かを考察することである。なお、ここでいう「授業」とは、科目担当者に限らず、ゲスト・スピーカーも含め、教える立場の者が、空間や時間などの限られた条件のもとで、目の前の学習者に対して、何を(知識)、どのように(教育方法)を考え、実践する行為として考えている。これまでの『RSL センター活動報告書』においても、藤井・奥野(2022)は、科目担当者の視点から、社会の現場で学ぶためのリテラシーの学習について考察している。また、大竹(2020)は、教員の専門性とは異なる大学職員の視点から、「実践知」を講義することの意義を考察している。本論の特徴は、①「立教サービスラーニング」についての知識の伝達を、これまでの自校教育(立教大学の建学の精神、正課外教育、正課教育について)の講義をふまえて検討すること、②授業時間内での学生の振り返りを促す工夫を検討すること、③ゲストスピーカーとしての授業の検討課題について、RSL センターの広報に関わる教育研究コーディネーターとしての役割との関連で検討すること、の 3 点である。

表 1:2022 年度「自校教育」のテーマと担当部署

	テーマ	担当部署
1	立教大学の建学の精神と立教大学での学び	チャペル
2	正課外教育(授業外の活動)における学び	ボランティアセンター
3	大学での学び方(正課教育)・立教生の学び	大学教育開発・支援センター
4	サービスラーニングと立教生の学び	RSL センター

出典:2022 年度シラバスをもとに筆者作成

## II. ゲストスピーカーとしての「サービスマーケティングと立教生の学び」をテーマとする授業の計画

この授業では、①立教大学の「建学の精神」「正課外教育」「正課教育」に関するこれまでの「自校教育」の講義をふまえ、サービスマーケティングとは何かを考えること、②シティズンシップ教育などの RSL の理念とその具体的な開講科目の紹介を通じて、学生に「サービスマーケティングの手法による学び」を促すこと、をおもな課題としている。ただし、具体的な授業内容は、RSL センターの 2 人の教育研究コーディネーターが、それぞれの経験を活かして実施することになっている。そこで、著者は、日本に比べて、学問的学びとの関連、市民としての責任、省察、互惠などのサービスマーケティングの目的が明確に議論されているアメリカの事例との比較（福留，2019）を参考に、以下の 3 部構成で、授業を計画した（表 2 参照）。

第 1 部では、これまでの「自校教育」部分を振り返りながら、「なぜ、立教大学にサービスマーケティングがあるのか」を学生に問いかけることにした。サービスマーケティングとは、社会の現場における活動と、教室における学問的な教育との結合を目指す教育プログラムである。そして、この考えは、建学の精神である「PRO DEO ET PATRIA」と深く結びついている。また、立教大学には「正課外教育の豊かな伝統」があり、それらは、2016 年からの「立教ラーニングスタイル」の考えのもと、①専門科目を中心とする多様な学びの一部として、②学生の関心に応じて組み合わせられ、③立教生独自の学びとして段階的に深めていくことが目指される。以上のよ

表 2:「サービスマーケティングと立教生の学び」の授業構成

1.立教大学にサービスマーケティングがあるのか？
・立教サービスマーケティング(RSL)とは何か？ ・なぜ、立教大学に RSL があるのか？ ・RSL センターの設置とその時代背景
2.サービスマーケティングの原理的検討:アメリカの事例
・サービスマーケティングの原型:ハル・ハウス(セツルメント)におけるレジデントの実践 ・背景としてのプラグマティズムの思想と「省察」の理論 ・アメリカにおける「サービスマーケティング」の誕生
3.立教大学におけるサービスマーケティングの特徴
・「シティズンシップ教育」としての RSL ・社会の現場での活動を重視する RSL の学び ・専門分野の学びを社会で活かすための RSL の学び

出典:筆者作成

うな、これまでの自校教育の内容を、授業の前半で学生に問いかけることにした。

第 2 部では、「サービスマーケティングの原理とは何か」を、日米比較の視点から考察するための基礎知識を紹介することにした。具体的には、①19 世紀末からのアメリカのシカゴにおけるヨーロッパ移民の急激な増加を背景とした（松本，2021:10）「ハル・ハウス」(セツルメント)とそこでの「レジデントの活動」(アダムズ，1969)を、サービスマーケティングの原型の 1 つとして紹介する。②同時期の「現場における経験から知識を得る」ことを重視するプラグマティズムの思想(デューイ，1957; ポイト，2020:143)と、そして、その発展として「省察」(振り返り)による学習のモデルの展開(中原，2013)を、その代表的な研究者(Kolb，1984; ショーン，2001; フレイレ，1979; ジルー，2014)の写真と文献を併せて紹介する。そして、③これらが、1980 年代アメリカにおける公立高校や大学でのサービスマーケティングの制度化(松本，2021)と、その後の国際的な発展の背景にあったことを伝えることにした。

そして、第 3 部では、これまでの議論をふまえ、立教大学におけるサービスマーケティングの特徴を、「シティズンシップ教育」「社会の現場での活動の重視」「専門分野の学びを社会で活かすための教養(全学共通科目)」という 3 つの視点から整理し、それぞれの特徴を、立教大学や RSL センターのホームページで公開している資料、RSL の実践系科目、例えば、コミュニティ(池袋・埼玉)、ローカル(地域共生・南魚沼)、グローバルA・B、グローバル(フィリピン)での学生の活動の様子の写真を用いて具体的に紹介することにした。



### Ⅲ. 授業への学生のリアクションと今後の授業運営案の検討

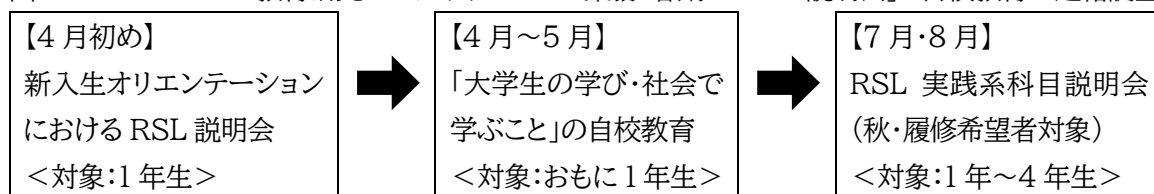
この授業では、サービラーニングのキー概念である「学問と社会活動の結合」「現場の経験から学ぶこと」について、学生が具体的なイメージを持てるよう、アメリカにおけるハル・ハウスでのレジデントの実践と、「省察の理論」をやや詳しく紹介した。そのため、授業終了後に実施している学生のリアクションペーパーには、「ハル・ハウス」「省察」をキーワードとするコメントや質問が多いのではないかと予想していた。しかし、実際は、それらへのコメントはごく少数で、全体としては、授業で学んだサービラーニングの視点から、自身の経験を振り返り、記述し、その意味を考察するものが多いという結果であった。そのため、この学生のリアクションをふまえ、来年度以降の担当回の授業について、次の2つの改善案を考えている。

第1は、学生のサービラーニングに関する振り返りの経験を、授業後に、授業関係者のみが把握するのではなく、授業時間内に、教室の中で共有する手段を考えることである。学生のリアクションペーパーには、サービラーニングの視点から、学生自身の経験を真摯に振り返っている姿があった。そのため、今後の授業では、学生同士で、自身の経験を共有する機会をつくることで、対話によって、新たな出会いと発見をすることができると考えている。また、そうすることで、例えば、学習モデルの1つとして紹介した「第三者との『対話』」を通じて、これまで当たり前と思っていた現実を、批判的に意識化できるようになる」という批判的教育学の視点を、講義を通じた知識としてだけでなく、教室の中で実感できるのではないかと考えている。

そして、そのための具体的な準備としては、①授業冒頭での少人数のグループの形成、②グループワークのための時間の捻出、③学生への問いの工夫が課題となる。特に、時間の捻出については、今年度の授業では、サービラーニングの原理を、日米比較の視点から学生が考察できるように、アメリカにおけるサービラーニングの歴史を、少し丁寧に説明するように心がけた。しかし、そもそも、ゲストスピーカーとしての1回限りの授業では、学生からのコメントや質問へのフィードバックが難しいという課題があった。そのため、この部分を簡単な図で示し、大幅に短縮することのほうが適切である。代わりに、学生の発言を促す工夫として、冒頭の「サービラーニングとは何か」「なぜ、立教大学にサービラーニングがあるのか」だけでなく、例えば、「ハル・ハウスにおけるレジデントの活動をどう思うか」「今後、RSLの、どの授業を履修したいか(したくないか)。その理由は何か」など、授業内容に関連させて学生に問いかけ、意見を聞こうと思う。

第2は、「大学生の学び・社会で学ぶこと」におけるRSLセンターの教育研究コーディネーターによる「サービラーニングと立教生の学び」の授業を、他のRSLセンターの業務に結びつけ、発展させることである。「大学生の学び・社会で学ぶこと」全体を、サービラーニング入門科目として位置づけることは、それぞれの科目担当教員の責任の下で進められている。そのため、ここでの課題は、RSLセンターの教育研究コーディネーターの通常の業務として実施する、①新入生対象のオリエンテーションでのRSL紹介(4月)と、②RSL実践系科目の履修を検討している学生対象の科目説明会(6月～7月)との接続をより充実させることではないかと思う(図1参照)。コロナ禍では、オリエンテーションや科目説明会を対面で実施することができなかったが、最近では、対面実施の可能性が広がっている。そのため、この時間軸において、RSLの魅力をどのように学生に伝え、RSL科目の履修を促していくのかを検討していくことが大切になる。

図1:RSLセンターの教育研究コーディネーターの業務:春期の「RSL説明会」と自校教育の連絡調整



出典:RSLセンターの教育研究コーディネーターの業務内容をふまえ、筆者作成

#### IV. おわりに

本論では、講義科目「大学生の学び・社会で学ぶこと」においてゲストスピーカーとして担当した「サービスラーニングと立教生の学び」に関する授業実践を、学生のリアクションペーパーの記述をふまえて振り返り、今後の授業運営についての考察を行った。当初、サービスラーニングに関する授業を計画する際、①現場の経験から学ぶためのスキルとして「省察の理論」を学生に理解してもらうこと、②学問と社会的活動を結合させるイメージを持ってもらうこと、③サービスラーニングの学びの成果として、シティズンシップの獲得があることを伝えること、④学習を始めるきっかけとなるよう RSL 科目を紹介することを、授業の目標に設定した。しかし、今回、実際に授業を実施し、かつ、リアクションペーパーを読んで発見したことは、学生は、授業を受けながら、授業内容を自分の問題として真摯に考えている(省察している)ということであった。そのため、次年度以降、ゲストスピーカーとして、同じテーマでこの授業をおこなう場合は、教室内での学生の「省察」を尊重し、それを学生同士で共有できるよう、授業内容を見直す必要があるように思う。

「大学生の学び・社会で学ぶこと」を履修した学生は、その後、RSL の実践系科目でのサービスラーニングの手法による学習を経験し、そして、自分の専門分野を中心とする 4 年間の学びを、自分自身のフィールドにおける社会課題の解決に向けた学びと結合させることが期待されている。そのため、このような「専門性に立つ教養人」への継続的な学びを、RSL センターの教育研究コーディネーターの一人として身近で見守り、サービスラーニングの視点から、長期的な視野のもとでの立教生の学びを支援していきたいと思う。

#### 参考文献

- ・ Kolb, D. (1983) **Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development.** New Jersey: Prentice Hall, Inc.
- ・ RSL センター(2022)『立教』の『サービスラーニング』を創り出す:RSL2011 年度～2021 年度の航跡, 『立教サービスラーニング(RSL)センター 2021 年度活動報告書』,8-22.
- ・ アダムズ,ジェーン(1969)『ハル・ハウスの 20 年 : アメリカにおけるスラム活動の記録』.東京 : 岩崎学術出版社.
- ・ 大竹秀和(2020)『『大学生の学び・社会で学ぶこと』におけるゲスト・スピーカーとしての専任職員の役割と学びについて』, 『立教サービスラーニング(RSL)センター 2019 年度活動報告書』,43-47.
- ・ ショーン,ドナルド(2001)『専門家の知恵:反省的实践家は行為しながら考える』.東京:ゆりみ出版.
- ・ ジルー,ヘンリー・A(2014)『変革的知識人としての教師 : 批判的教授法の学びに向けて』.横浜 : 春風社.
- ・ デューイ,ジョン(1957)『学校と社会』. 東京 : 岩波書店.
- ・ フレイレ,パウロ(1979)『被抑圧者の教育学』. 東京 : 亜紀書房.
- ・ 松本康(2021)『「シカゴ学派」の社会学:都市研究と社会理論』.東京:有斐閣.
- ・ 松本徹也(2021)「サービスラーニングのこれまでの歴史とは」,『ふくしと教育』27,6-7.
- ・ 中原淳(2013)「組織学習論の理論的系譜と研究動向」,『日本労働研究雑誌』639, 4-14.
- ・ 福留東土(2019)「日本の大学におけるサービスラーニングの動向と課題」, 『比較教育学研究』59,120-138.
- ・ 藤井満里子・奥野敦史(2022)『『大学生の学び・社会で学ぶこと』2021 年度リニューアル報告:『社会の現場で学ぶリテラシー』とは』, 『立教サービスラーニング(RSL)センター 2021 年度活動報告書』,1-7.
- ・ ボイト,ハリー・C(2020)『民主主義を創り出す:パブリック・アチーブメントの教育』.平塚:東海大学出版部.